
変わる日常

ウォーター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わる日常

【Nコード】

N3652H

【作者名】

ウォーター

【あらすじ】

ある出来事をきっかけに、突然菌が見えるようになった新一。そこから、普段の新一の日常生活が悉く崩れ去ってしまう…。そのことに新一は……。名探偵コナン×もやしもののコラボです。まだ連載の方は不慣れですが、宜しくお願い致します。

プロローグ：異変（前書き）

タイトルも内容も大幅に変更しました。少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ：異変

「ん…。」

窓から差し込む優しい朝日の光と、小鳥のチュンチュン…と静かに響く囁^{ささ}りで目を覚ました俺は、眠たい目を擦^{こす}りながら、ゆっくりと上体を起こし、グーッと高く背伸びをした。

俺の日課としては、朝起きた時の背伸びは、毎日欠かさずやっている。こうでもしないと、俺の身体^{からだ}は今日1日、上手く機能してくれないのだ。

しかし、昨日は事件で帰りが遅くなったせいかな、俺の身体はなかなか目覚めてはくれず、暫くボーっとしていた。

すると突然、俺の額に、何かがコツンとぶつかって来たものだから、俺はそれがぶつかった額を手でさすりながらベッドから離れると、かなり不機嫌な顔で窓の外を見た。

俺は最初、誰かが外から小石を投げつけたと思い、もしそうなのであれば、そいつをとっ捕まえて叱^{なぐ}ってやろうかと思った。

だが、窓ガラスには、小石をぶつけて割れた痕跡^{こんせき}どころか、ヒビも全く入ってなかったのだ、俺はただの勘違いだと思い、再びベッドに戻り、軽く息を吐いた。

だが、俺は自分の額に当たったものが少し気になったのか、それが落ちた場所をただジッと見ていた。とその瞬間、俺は我が目を疑った。

何とそこには、俺が今まで見たことが無いような生物達が、

「わーいッ！」

と言いながら布団の上をちょこまかと走っていたのだ。

しかもその時、俺の頭では何か嫌な予感を察したのか、俺は慌てて天井を見上げてみた。

そして俺は、その信じられない光景に言葉を失っていた。

そう、そこには何と、布団の上で元気に走り回っていたやつ以外の生物達が、俺の部屋を埋め尽くす位、数多く存在していたのである。

「なッ、ななッ、何なんだ、コレはアーツ！！？」

その状況に、俺は何時の間にか、普段自分が出さないようなを出して叫んでいた。

そう、この日からだったのだ……。こいつ達と出会ったこの日から、俺の日常生活は悉く崩れ去っていき、それと同時に、こいつ達との生活が静かに始まったのは……。

ブログ：異変（後書き）

こんばんは。ウォーターです。今回の小説は、前回執筆しております『不思議な出会いと不思議な日常』の内容を大幅に変更致しまして、再び更新致しました。本当は、このコラボ小説を執筆するのを止めようかと考えていましたが、どうしても私は、この名探偵コナン×もやしもののコラボネタをやってみたいとずっと思っていたのです。私は、名探偵コナンともやしもんが好きで、何時かこんなコラボ作品を作ってみたいと思っていました。なので、今回内容を大幅に変更致しまして、もう一度1から作り直そうと思った理由で御座います。私はまだまだ未熟ですが、少しでもこの作品を楽しんで頂けるよう、精一杯努力していきたいと考えています。評価・感想等もお待ちしております。更新は遅いですが、どうか宜しく願います。以上、ウォーターでした。

第1話：変わる朝（前書き）

大変お待たせしました。少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

第1話：変わる朝

「な……ッ。」

あまりにも突然のことだったので、新一はなかなか上手い言葉が見つからず、ただ呆然として菌達を見ていた。

その一方で、新一の部屋をフヨフヨと楽しそうに漂っていた菌達は、そんな様子の新一を見ながら、

「何だ？この人間は……。」

や、

「俺達おれらの姿が見えることがあまりにも衝撃的過ぎて、俺達を見ながら呆然としてるぞ……。」

等、口々にそんなことを言っていた。

その中の一体で、ベッドの上でちょこまかと元気に走り回っている菌：P・クリソゲヌム、通称青カビが走るのを止めて、下から新一を見上げて言った。

「何だよ、若者……。さっきから俺達のことをジロジロジロジロ見やがって……。俺達は見せ物じゃねえんだぞ……！」

一方、青カビにそう言われた新一は直ぐハッと我に返ると、その青カビの言葉にムツとしたのか、少し怒った口調で青カビに言った。

「なッ！？何でお前達にそんなこと言われなきゃなんねえんだよ！
！大体、此処は俺の家だぞ！！！何処の誰だか知らねえけど、勝手に人ん家の中に入って来るんじゃないやねえよ！！！！！」

その言葉に対して、菌達は暫く^{しば}キョトンとした表情で新一を見ていた。

しかしその数分後、再び彼等^{かれら}が動き出したかと思うと、天井のある1ヶ所に集まり出し、そして口裏揃えて一斉に新一に向かって叫び返したのだ。

『外から勝手に入って来たんじゃない！！俺達はこの家が建てられる前からずっと此処で生活してるよ！！お前達の周りですっとな
！！！！！！』

「……………はあ？」

新一は、菌達の叫び声に耳を塞ぎ^{ふさ}ながら、全く意味が分からないような表情をしていた。

そしてその菌達の言葉を、まるで頭から否定するかのよう^{よう}に菌達に言った。

「はッ、何理由^{ワケ}の分かんねえこと言ってるんだよ。んなことある理由^{ワケ}

ねえじゃん…。

だってそうだろ？今この家に住んでるのは、俺と海外に行ってる父さん、そして母さんの3人だけだぜ？（まあ、今両親は海外に行ってるから、実際は俺1人だけなんだけどな…。）

だけど、お前達の話からすると、この家が出来てからずっと此処に住んでるってことだ。

それだったら、この家の誰かがお前達のことを見てる筈だろ？だけど、今まで此処で生活して来たけど、そんなこと、一度たりとも無かったし、父さん達から聞きもしなかったぜ？それなのに、何でんなことが言えるんだよ？」

その新一の言葉に対し、菌達は再び一斉に叫んだ。

『それはただお前が見えなかっただけで、俺達はずっと此処に住んでいたんだ！！』

だって俺達は菌だから、普段人間の目には見えないんだ！！』

菌達は必死になって新一に説明しようとしたが、新一は

「ハイハイ、もうその話は良いから…。」

と軽くあしらって、そんな話を全く信じようとしなかった。

昨日事件が遅くなったせいで寝るのが遅くなったから、疲れが完全に取り替えていない。だから今日は朝からこんなものが見えちまってるんだと、新一はそう考えていた。

外では新一の家の中とは逆で、暖かい光を大地に注ぎながら、太陽は静かに昇っていたのであった。

第1話：変わる朝（後書き）

こんばんは。そしてお久しぶりです。ウォーターです。今回は、テストやサークル等がとて忙しかったので、なかなか次の話を執筆することが出来ませんでした。が、やっとのことで執筆することが出来ました。今回は、新一と菌達の会話が中心でした。しかし、なかなか菌達に合う話し方が思い浮かばず、結局自分で考えた話し方になってしまいました。なので、思いつ切り原作を無視してます。ですから、「この菌達の話し方、凄く可笑い！！」と思う方もいらっしゃると思います。なので、その時には、感想等で指摘して下さい。まだまだ未熟な作者で本当にスイマセン（――）m又、小説更新も不定期なので、今度は何時^{いつ}執筆されるか分かりません。しかし、作者もなるべく早く執筆するよう、頑張つて行きたいと思います。感想・評価等も宜しく願います。では、又次回のお話でお会いしましょう。

第2話：騒動（前書き）

昨日に引き続き、又更新致しました。今回は少しだけ菌の名前が出て来ます。

第2話：騒動

今日は普通に学校があることを思い出した新一は、急いで紺のブレザーに着替えながらも、菌達の必死な説明を半ば聞き流すようにして聞いていた。

しかし、ブレザーに着替えるのはほんの数分しか掛からなかったのに、新一は鞆をヒョイと持つと、簡単に朝食を済ませる為に自室を後にし、少し早歩きで台所に向かっていた。

勿論新一と共に菌達も、ではあるが…。さて、漸く台所に着いた新一は、菌達と口喧嘩しながらも、朝食となりそうなものを必死で探していた。

しかし、此処暫くこの家に住んでおらず、食材も買っていなかったせいか、食材らしい食材は殆ど残っていなかったのである。

この様子に、新一は心の中で軽く舌打ちをした。

（クソッ……。こんな時に限って食べられるものが無いなんて……。ん？待てよ……。確か戸棚の中に、パンがまだ残っていたような気がするな……。）

色々と考えていた時、ふと戸棚の中にパンがあったことを思い出し

た新一は、急いで戸棚の扉を開けて、その中を見た。

案の定、その中には、パンが2・3枚だけ入った袋がポツンと寂しく置いてあったのである。

それを見つけた新一は、漸く朝食にありつけると安心し、その袋を取り出そうと手を伸ばした。

と、その時だった。その戸棚の中から突然、

「ワイー。」

という声が聞こえて来たのは…。新一はその声を聞いた瞬間、今まで抱いていた安心感が一気に不安に変えていった。

そして、その感情を抱えたまま袋を掴むと、恐る恐るそれを引っ張り出し、そして不安な表情でその袋をバツと開いた。

その瞬間、袋の中に溜まっていた青カビやA・アルテルナータ、通称ススカビ等が

「ワイーッ！！」や

「ヤッホーイ！！」等と言いながら、その袋の中から一気に飛び出して来たのだ。それに驚いた新一は、

「わぁッ！！」と言った後、驚きのあまり、その場に尻餅しりもちをついてしまったのだ。

その袋から解放された青カビやススカビも加わったので、その数はさつきよりも遥かに増えてしまっていた。

そのことに、新一はハア…と深い溜め息をつく、袋に入ったパンを何処か諦めた表情で見っていた。

案の定、そのパンは、赤や青（実際は緑なのだが…。）等、色んな色のカビが生えており、そのパンは、最早食べられる状態ではなかったのである。

（そりやそうだよな…。あれから何日も家に戻っていなかったんだ。冷蔵庫に入れていたのなら話は別だが、戸棚に入れたまま何日も放置すれば、普通こんな風になるよなあ…。

まあ、分かりきったことだけどなあ……。）

そう思いながら、新一は再び深い溜め息をつく、そのパンをゴミ箱の中にポイツと捨てた。

その時に発生した音に気付いた菌達は、
「かもすぞー！」と張り切った声を出しながら、そのパン目掛けて一直線に向かった。

それを横目でチラツと見ていた新一は、菌達に気付かれないように、そつと台所を後にし、そのまま家を後にした。

結局新一は、朝食を食べることなく、空腹と突然の出来事と寝不足による疲労感を抱えながら、学校に向かって行ったのであった。

第2話：騒動（後書き）

お早う御座います。ウォーターです。今回は少し早めに更新致しました。菌の名前はまだそんなに多くは無いですが、これから少しずつ多く出していこうと考えています。再び、評価・感想等もお待ちしております。

第3話：戸惑い（前書き）

お待たせ致しました。少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

第3話：戸惑い

（何なんだよ、アイツ達……。俺ん家が建った時からずっと住んでいたって！？んな馬鹿な話が信じられつか！大体よ、昨日まではあんな奴らいなかったんだぜ？それが今日になって急に現れて……。やっぱり俺、疲れてるのかな？いや、きっとそうだ！！昨日は何だかんだで帰るのが遅かったからな……。

きっとそのせいで、朝になってあんなものが見えちまったんだ……。きつとそうなんだ！）

少し早足で学校に向かっていながらも、新一はずっと朝の出来事について考えていた。

しかし僅か数秒の内に、新一はこのことを、“昨日の疲れから来たもの”と結論付けたのである。

少しだけ新一自身の願望を含んではいたのだが…。

そう結論付けた新一は、直ぐにそのことを考えることを止めると、一旦足早に歩いていた足を止めた。

そして何処までも広がる青い空を見上げ、フウ…と軽く息を吐いた。

（……………しかし、今日は良い天気だなあ……………。……………もう止めよう……………。さっきのことを考えるのは……………。

だってこんなに天気が良いんだぜ？何時までもそんなことを考えてたら、埒があかないし、気分までも暗くなっちゃう……。
久々の学校なんだし、それだけは避けねえとな……。)

そう思った新一は再び軽く息を吐くと、何処までも広がる青い空から再び街中に視線を移すと、直ぐに又学校に向かって歩き出そうとした。

だが次の瞬間、新一はその足をピタツと止めると、自分の視界に飛び込んで来た光景に驚きで目を見開き、ただその光景を呆然として見ていた。

そう、今新一の目の前に広がっているその異常な光景こそが、新一の再び学校に向かって歩もうとした足にブレーキを掛けたのである。
高い高層ビル、住宅街、道路に車が走る光景、だいぶ大きく育った植木や花が咲いている花壇、そして人並み……。それは普段から見慣れている光景だったので、新一はそのことにあまり驚くようなことはなかった。

だが新一はそれら以外にも、普通の人なら絶対見えない筈があるものが見えていたのだ。

そう、それはさっき自分の家で見たまものを含め、現時点では数え切れない位いる、無数の菌だったのだ。

ニキビの原因菌であるP・アクネスやC・ジフテロイド、通称ワキガ菌、フケの一因であるM・フルフル、更には風邪菌であるライノウィルスやインフルエンザウィルス等の菌やウィルスが人並みの中

に紛れ込んでいたのだ。

それによって、新一は直ぐにでも学校に向かって歩きたくても、まるで足だけ金縛りに遭っているかのように、なかなかその一步を踏み出せずにいたのである。

それと同時に、新一は肩をガクツと落とし、更に疲れた表情をする
と、何処か諦めた様子でその光景を見ていた。そして普段の自分では絶対に有り得ない弱気な考えを心の中に抱いてしまっていたのであった。

（俺は一体どうしちゃったんだ…？さっき俺ん家で見たものが、こんな場所でも又見えるなんて……。

これはマズい、かなり重傷だ……。

今日は学校に行かず、このまま帰って寝た方が良いのかな？）

とその時、今日の異常な現象にかなり悩んでいる新一を、まるで遠くで嘲笑うかのよう
に、菌達が、

「ワイッ！」

と喜んでいる声が微かに新一の耳に届いていたのであった。

第3話：戸惑い（後書き）

こんにちは。ウォーターです。久々に小説の方を執筆致しました。そして、こう読んで欲しいというものは“《》”、読めない漢字は“（）”で振り仮名を付けることは勿論のこと、今回は新たに、どうしても長くなってしまふ文章は、改行を行って文章をなるべく短くしたりして、少しでも読者に読みやすい小説作りに取り組んで参りたいと考えています！しかし、まだまだ文章としては読みにくいとところもありますので、その時は感想の中で、指摘という形で言ってお下されると有り難いです。又、評価の方も宜しくお願いします。本日は有難う御座いました。

第4話：再会（前書き）

大変お待たせしました。今回は菌があまり出てきません。

第4話：再会

「……新一？ねえ、もしかしてそこにいるの、新一なの？」

と、その時だった。新一が良く知っている女の子の声が遠くの方から聞こえて来たのは…。

そのことに、新一はハッとした後、あまりの衝撃で今まで動かなかった身体が、その声のお陰で動くようになったことを確認すると、その声がした方に身体を向けた。

するとそこには、髪の毛の長い何処か優しい雰囲気を持った女の子…毛利蘭が、今にも泣きそうな表情でそこに立っていたのだ。

そんな蘭の姿を見た新一は、身体を一瞬ビクツと強張こわばらせると、かなり戸惑った表情で蘭に言った。

「ら、蘭…。どうしたんだ？こんな朝っぱらからそんな顔を…！？」

が、その時だった。突然蘭が新一のブレザーを掴んだかと思うと、それを通して、新一の身体を何度も何度も揺らし始めたのは…。

そして、今まで溜まっていた新一に対しての感情を一気に爆発させ

ていたのであった。

「どうしたんだ？」じゃないわよ！馬鹿ッ！！何で戻って来たのを私に連絡してくれなかったのよ！！

私、どれだけ心配してると思ってるのよ！！最近全然連絡して来ないから、私…私……。」

そんな蘭の様子にヤバいと思った新一は、更にその感情が爆発しないように、慎重に言葉を選びながら蘭に言った。

「わ、悪かったよ、蘭…。確かに、お前に連絡しなかったことは謝るよ。

だけど、お前に連絡しなかったのは、急にこっちに戻ることになったからなんだ…。それでお前に連絡するのを忘れたんだ…。だから許してくれ！蘭！！な？」

そう言って、新一は自分の顔の前で手を合わせて、何度も蘭に謝っていたのであった。

しかし、そんな新一の慌てぶりを見た蘭は、クスクス笑い始めたかと思うと、突然お腹を抱えて大声で笑い始めたのである。

その一方で、突然笑い始めた蘭に、新一はさつきよりも更に焦った表情で、半ば叫ぶように言った。

「お、オイ！一体何がそんなに可笑しいんだよ！？」

しかし、新一のその言葉に反応した蘭は、笑ったことで目に溜まった涙を指で捌いながら、まだ止まらない笑いを必死に堪えて言った。

「だ、だって、新一のその慌てぶりが、あまりにも可笑しくて……い……。」

「…ハア？んだよ、それ……。」

「ご、ゴメン、新一……。まだ笑いが……止まらなくて……。プププ……。」

「オイ……。もういい加減にしろよ、蘭……。」

しかし、新一が言っても尚^{なお}笑いが止まらない蘭を見て、新一は何処かホッと一安心していた。

何故なら、そのことで、蘭の顔には、何時^{いつ}もの明るい表情が戻っていたからである。

しかし、それと同時に、蘭に申し訳ないという気持ちで次第に新一の心は満たされていた。

(蘭…。ゴメンな……。お前にこんな辛い思いをさせちまって……。お前は何時でも帰って来ない俺のことを、ずっと待ってるんだよね……。それなのに、俺は……。一刻も早く黒ずくめの奴らをぶっ潰して、完全にこの姿に戻らねえと……。)

「そんなに固くなり過ぎてると、今度はお前の身体が壊れるぞ。」

新一がそう決心した、まさにその時だった。突然新一の肩から、聞き覚えのない声が聞こえて来たのは…。

突然聞こえて来た声に新一はビクツとすると、驚いた表情で、その声が聞こえて来た方の肩を見た。

そして、自分の肩に乗っている生物の姿を見た瞬間、この時まで忘れていた、今まで自分を悩ませていた厄介やっかいな問題を、再びその頭に蘇らせたのであった。

そう、その厄介な問題とは…。

“何故今まで見えていなかった生物が今見えるようになったのか…。そして、この生物は一体何なのか…”という問題だった。

そのことを思い出した新一は、困惑した表情をさせると、その顔を手で覆い、思い出さなければ良かったと心の中で後悔していた。

（あちゃー。そうだった……。蘭のことばかり考えて、コイツ達^らのことをすっかり忘れた……。今それどころじゃなかったんだったな……。俺……。でも、蘭のことも気になるし……。クソッ！一体どうすれば良いんだ！俺はどうすれば良いんだよ！！）

更に心の中でそう思いながら、新一は今まで顔を覆っていた手を外すと、今度はその手で頭を抱えた。そして、かなり深刻な表情をさせながら、何時もよりも深い溜め息を付いたのであった。

と、その時だった。新一の肩に乗っていた菌・S・セレビシエ、通称酵母菌が、何処か楽しそうな表情で、

「醸すぞー！」

と跳ね回りながら元気な声で言ったのは……。まるで、それを楽しい遊びだと思っているかのように……。

そんな2人と1体の様子を、少しずつ青く広がる空に昇っていく太陽が、何処か面白そうな表情でそれを見ていたのであった。

第4話：再会（後書き）

こんばんは。そしてお久しぶりです。ウォーターです。漸くこの話の続きを執筆することが出来ました。本当に執筆ペースが遅くてスイマセンm（――）m次回からは、もう少し早く執筆出来るように頑張りたいと思います。評価・感想等も宜しく願います。本日は、本当に有難う御座いました。（ハ・ハ）ノ

第5話：別れ、そして新たな出会い（前書き）

こんばんは。ほぼ連続で執筆致しました。あとがきに重大発表があります。

第5話：別れ、そして新たな出会い

そして暫く^{ひまじ}考えていた新一は、ふとある決意をした後、クルツと蘭の方に向き直すと、何処か真剣な表情で蘭に言った。

「悪い！蘭！！俺、急に事件の依頼が入っちまって、それに行かなきゃならなくなっただ。だから、今日高校に行くの止めとくわ。悪いけど、蘭……。それを先生に伝えといてくれないか？」

しかし、そんな苦しい言い訳が通用する理由^{ワケ}は無く、蘭はその言葉に対して、厳しい表情をしながら新一に言った。

「ハアッ！？何言ってるのよ！アンタは！！新一ねえ、アンタ最近無断で欠席してるから、そろそろ学校に行かないと、本当に高校を卒業出来なくなるわよ！」

もしそうなくても、私は知らないからね！絶対助けてなんかあげないんだから！！」

そんな蘭の厳しい言葉を投げかけられた新一ではあったが、当の本人は、何も言い返すことが出来なかったのである。

何故なら、蘭が言うように、新一が無断で高校を欠席していること

は、紛れもない事実であるのだから…。

しかし、此処でこのまま引き下がってしまったら、今自分の肩にいる生物のことを詳しく調べることが出来なくなってしまう！

そう思った新一は、蘭に殴られる覚悟で、顔に手を合わせて更に深く頼み込んでいた。

「頼む、蘭！今頼れるやつはお前しかいないんだよ！俺も、今回の事件のことをもっと詳しく調べてえんだ！だから、頼む！この通り！！！」

そう深くお願いしていた新一だったが、それを横目で見ていた蘭はクスツと笑った。

そして軽く息を吐いた後、少し困ったような表情で静かに言った。

「フウ……。もう、アンタは昔ツからそう……。一度やり出すと決めたらトコトン最後までやり通さないと気が済まない……。そんな新一の性格に、私は何年間付き合って来たことか……。」

「じ、じゃあ……。」

突然聞こえて来た蘭の言葉に、最初新一は驚きの表情を見せていたが、次第にその表情を明るくさせ、声も少し高くして言ったのである。

る。

その一方で、その言葉を聞いて、溜め息混じりの息を吐いた蘭は、新一の顔を見ながらニコツと笑うと、更に続けて言った。

「…分かったわよ、新一……。私、ちゃんと先生に言っておく。だから新一も、事件の調べもの、ちゃんとやんなさいよ。」

その蘭の言葉に、新一は申し訳なさそうな表情をすると、少し声のトーンを落として、静かに言った。

「……悪いな、蘭……。全てが済んだら、直ぐに戻って来るから……。必ず……。絶対に……。だから、少しだけ待っていてくれ、蘭……。」

そう言った新一はクルツと蘭に背中を向けると、そのまま後ろを振り向かず^{振り向かず}にただひたすら走って行ったのであった。

その一方で、そんな新一の背中を見ていた蘭の表情は、何処か寂しい表情をしていた。

そして、新一の姿が完全に見えなくなったことを確認した後、蘭はクルツと身を翻すと、小声で

「馬鹿……。」

と呟き、そのまま一人でトボトボと寂しく学校に向かって行ったのであった。

ー 一体どの位走っていたのかは分からないが、どうやら何処かの商店街に辿り着いていたことをその雰囲気を見て知った新一は、長時間走ったことでもかなり荒くなつた息を少しずつ整えながら、その商店街をグルッと身体を回転させながらジッと見回していた。

その際に、新一の肩に乗っていた酵母菌は、そこから振り落とされないよう、必死になってそこにしがみついていた。

その際、新一の肩に乗っていた酵母菌は、

「キヤーツ！」とか、

「振り落とされるうゝー!!」

と小声で何度か叫びながら、何処か楽しそうにしていたのであった。

その一方で、酵母菌の声をほぼ耳元の近くで聞いていた新一は、その声に次第に苛立ちを覚え始めたのであった。

そして遂に、周りに人が歩いているのにも関わらず、そんな風に楽しそうにしている酵母菌に、まるでその怒りをぶつけるかのようにいきなり叫び出したのである。

「だーツ！もう五月蠅えツ！！少し静かにしろ！！これじゃ集中出来ないだろ！！」

しかし、新一の言葉にカチンと来た酵母菌は、今度は新一に食って掛かるように言った。

「何だと！このチキン野郎ツ！！人間の分際で何様のつもりだ！！」

元々人間は、俺達菌がいなければ生存することだって出来なかったんだぞ！！もつと俺達に感謝しろ！！」

だが、酵母菌のその言葉に対して、新一は意味が分からないと言わんばかりに叫んだ。

「オイッ！今のこの状況とその話は全然関係ねえだろ！？今こんな時に、そんな話をしてんじゃねえよ！！」

「何だと！？偉そうにするんじゃない！このチキン野郎ッ！！」

「だーッ！俺は“チキン野郎”じゃねえ！！俺は、工藤新一だッ！よく覚えとけッ！！！！」

そうやって、人目を気にせずに喧嘩をしている2人ではあったのだが、その喧嘩の内容は他の人には全く聞こえていないので、周りの人々は、その喧嘩をあまり不審がらず、そのまま素通りしていったのである。

時々、通りかかる人の中では、

「何であんなところに1人で突っ立っているのかしら？」

と不思議がる人もいたが、それも一時のことであり、直ぐに新一の横を素通りしていたのだった。

そのことを、酵母菌と喧嘩をしながらも横目でチラッと見ていた新

一は、少しだけ有り難いと思っではいたが、心の何処かでは、切ない位の虚しさを感じていた。

（ハアア…。 “日本警察の救世主”と言われた俺が、こんなところで一体何やってんだ……？ 情けねえ……。 ）

そんな風に思った新一は、あまりの虚しさに、何時も以上に深い溜め息をついた。

そしてそれと同時に、この気持ちは他の人に言っても決して分かってくれないだろうと思い、どうしようもないやるせなさに、今にも泣き出しそうになっていたのだった。

しかし、そんな新一の様子を一部始終、ただジッと見ていた少年がいた。

それは、髪が金色で、身長は新一よりかなり小さく、そして肩にはA・オリゼー、通称麴カビこまじを乗せている少年だった。

そしてこの後、決して交わることのない2人が、此処で運命の出会いを果たすことになるのである。

その時、商店街のシンボルとも言える大きな柱時計が、まるで2人の運命的な出会いを祝福するかのように、盛大なメロディーが、商店街中に響いていたのであった。

第5話：別れ、そして新たな出会い（後書き）

こんばんは。ウォーターです。今回は、ほぼ連続という形で小説を執筆致しました。今回の話は、新一とテレビシエの喧嘩シーンで終わったように感じますね（・・・）。ま、これも一種のコメディと思って見逃して下さい。本当にグダグダでスイマセン（――）m。さて此处で、皆さんに重大発表があります。実はこの小説、当初は菌のみで行こうと考えていたのですが、“農大生を出して欲しい！”という要望がありましたので、急遽農大生を登場させることに致しました（――）！（パチパチ）なので、次回から、その農大生が登場します！誰が出て来るかは、次回になってからのお楽しみです！！又、評価・感想等も引き続き宜しくお願いします。今回は有難う御座いましたm（u―u）m。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652h/>

変わる日常

2010年10月9日20時52分発行